表 記

北 秀

万 葉 集と

良 後 に 編纂 さ れ わ が 玉 現 存最 古の 和歌

で 四五 0 ○首あ ま りの和 歌を 収 め る。 全二十巻。

は 大伴家 持 が 深 < 関わったことは確実で あろう。

作 歌 年代 は、飛鳥時 代から奈良時代中期 までの一三〇年間ほど。 これ を 期 に 分 け る

の 者は 天皇、 皇 族、 、 貴 族、 官人 を中 心に、 一般庶民まで 含む。

作 者 の 出 身地は近畿 地方 が多い が、 東歌や防人 歌 など東国人 の歌 も収 め 5 れ て ŀ١ ಠ್ಠ

に ょ ま れ た 地 域 は 大和 玉 (今の 徐良県) を 初 め とする近畿地 方が多 ĺ١ が、 全国 に及

৻ঽ৾৾ 作 者の 関係 で、 九州北部や越中国(今の富山 県及び石川 県 の一部) も多い。

が 全 = + 編 · 巻 が され 一 度 以後、 に成 増補が った のではなく、 繰り返され 平 城 て、 現在見る形になっ 遷 足都からほ ど 遠 からぬ頃 たと 考えられ に 飛 鳥 る 時 分

歌 Ŕ 基本的 に雑 歌 相 聞・ 挽 歌 ح l١ う三つ の 分 類 の も ۲ に配 列 さ れ て しし ಠ್ಠ こ の 分

類 を部 立 (ぶだて) という。

は 宮廷 聞 は 恋 の 儀礼 の 歌 歌 など公的 挽 歌 は 死 な歌が多い にまつわ る 0 時 代 雑 が 歌 降 は る そ ۲ の 雑 他 歌に た は様 だ 々 な 歌 期 が 万 増 葉 え の て 頃 ゅ の 雑

当時は ま だ ひらがなもカタカナも発明され て しし な かっ た の で、 万 葉 集は す ベ て 漢 字 ഗ

み で 表 記されている。 このため、 現代では 読み 方の確定し な ŀ١ 歌 もあ る

は、「春」「山」「恋」などの

表 記に 波は 流る 当たっ 也ゃ 麻」「古非」 て などのように、 漢字の発音(音また)ように、 漢字の意 は 味を生か 訓 $\overline{}$ だけ し を た 借 用 法 IJ た ۲

用

法 ۲ が ある。 漢 字 の発音だけを借りた用字を万葉仮名と いう。

万 葉 伝 来 集 して の原本は今に伝わらない いる。 全巻揃った写本は が、 部分的 鎌倉時代 な 後期 がらも平安時代 の も の (西本願寺 の写本 本 桂 $\overline{}$ が 最 本な も古 ど しし が

安時 代に なると、 漢字のみで書か れ た 万 葉 集は 読 む ことが難 し < なっ て た で

上天 皇 が天暦五年 (九五一)に、 宮中 の 梨 壺 に 和 歌 所 を置 しし て、 五人 の たち へ 梨

壺 の 五 人 ľ 万葉集 の 訓を付 け させた。 こ n が万葉集研究 の はじ めとい える。

倉 の 僧仙 覚は 万葉集の写本を多数集め て本 文校 行を行 い、注 釈書も著

なると、 契沖 賀茂真淵などの国学者たちによっ τ 研 究が進んだ。

今で も「 万 葉 集 の 歌番号」 ح ا て 用 5 れて いる。

に

国

歌大観』

が編纂されたときに、

万葉集の

全て

の

歌

に

番号が

つ

け

5

れ

た

に 校 本 総 索引 ۲ が 作ら れ 研究の 基本 的 な 道 具 ع な つ て 11 る

2 万葉集の名義 (書名 の由来)

あ ָרו ע 確定していな

は「多く \neg 集めた書」 ということであろうから、 ポ 1 ント は

ということになる。

説の中で次の二説が有力。

葉」を「言の葉」と解 多くの言葉= 多く の 歌とする説 (仙覚 など

- ば、 『万葉集』成立以前に、 の書名にお 歌を葉に例えてもおかし いては、 歌が林に例えられてい 山上憶良が編纂し くない。 る。 た。 歌を林に例 類聚歌林』と えることがあ いう書物が ある。 る の な 5
- ではない 葉和歌集』とは 古 「今和歌 か。 言わ 以 降 の な L١ 八代集では、 とすれば、「 書名に 葉」 ¬ にっ 和歌」 和歌」 を含むが、 の意味が含まれて 5 万 葉集』 を ١J る 5 の 万
- 葉」を「時代」 ۲ 解 末 永 く伝われという願いを込 めたとす る 説 (契沖 な
- 漢籍には「葉」 を「世」「代」の意に用いた例がある。
- * 5 め、 古事記』序文にも「天皇詔り い 偽_はり を削り実を定めて、後葉に流へむと欲ふ』とのりたまひき」 たまひしく、『 ……帝紀を撰 び 録しる Ų 旧辞 とある ... を 討ち ね 竅さ

込 が有 力だが、「 というような折衷的な考え方も可能かもしれな 多くの歌を集め、 それが万代の後までも伝わるようにと ιį の しし を

3 題 詞 序 文 • 歌 • 左注

もある。 の に題 の 付 ١J ている 作品は多い。 これ を題詞 ح い う。 歌 の 後 に 注 の 付 l١ て しし る も

津 件皇子の 屍 を葛城の二上山 この注を左注という。 に 移し **葬**ば る 時、 大来皇 女 の 哀 U び傷 む 作 歌二

首 題詞

- 磯のうへに生ふる馬酔っつつそみの人にあるわ 人に は二上山 ら を 弟 は 世
- 右一首、 のへに花を見て感傷哀咽 ふるに、 木を手折らめど見すべき君がありと言はなくに(一六六)が、たをのど見すべき君がありと言はなくに(一六六)れや明日よりは二上山を弟世とわか見む(ニ・- デチン 移 し してこの歌を作るか。 葬る歌に似ず。 けだし疑はくは、 伊 勢 の 神が 宮より京に還る時

定。 他 と歌 巻では大伴家持などの ح の 間 に 漢 文の 序の 作にわず ある歌もある(ただし、 かにある程度) 序 文 の ある 作 品 は ほ ぼ 巻 五 に

子等を思ふ歌一首 序を并せたり

釈迦如来い、 至極の のたま しび ^ ا) . 大聖すら尚 ずあ 又説きたまはく、 金口に正に説きたまは し子を愛 しぶる心 愛は子に過ぎたりといふこと無しとのたまへ Ź あり。 等しく衆生を思ふこと、 況は むや 世点 間が であるかと ό 睺ご 序 か の は 如 ָרו נו しと

食^は めば 子ども思ほ ゅ 栗 食 め ば ま て 偲ぬ は ゆ 処〈 ょ IJ 来り も の そ

眼交にもとな懸りて
まなかり 安眠し寝さぬ (五・八〇二)

銀 も金 も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも(八〇三)レハヘゥロ ヘッカロ らません しょう 反歌

歌

歌

4 ・各期の特徴

	第一期	第二期	第三期	第四期
期間	壬申の乱672	壬申の乱~	天平五年733頃	天平宝字三年759
歌 の 特 徴	・ 蘇我氏の時代から	・ 王申の乱後の安 ・ 王申の乱後の安 ・ 王申の乱後の安 ・ 日瀬が拡大 ・ 長歌が落しく発	・律令制が確立し、 ・記紀が成立し、 ・記紀が成立し、 ・記紀が成立し、 ・歌人層が出るなど、文 が出るなど、文 であった ・歌人層が飛躍の記 に拡大し、歌の に拡大し、歌の	・
歌 の 特 徴	い格型歌格口歌古代調 は が 集 的 歌 田 い ち 五 団	定 展 長 財 門 が が が 歌 人 が 拡 大 が も 大 が も た た り た り た り た り た り た り た う た う た う た	歌とを表している。 歌とを表している。 歌とを表している。 歌とのでは、 歌とのでは、 歌とのでは、 歌とのでは、 のでは、 のでは、 のでは、 のでは、 のでは、 のでは、 のでは、	的 優 社 な は な 美 交 る 衰 歌 、 の 退
代 表 歌 人	額 天 有 舒田 王 天皇子皇	志 詩 宗 大 清 皇 子 大 自 皇 子 と 会 子 と 会 と 会 と の に 。 に 。	大伴旅人 高橋 虫麻 山上憶良 山上 島 大伴旅人	造新羅 使人たち 大伴家持 大伴家持 大件家持

^{*} 磐姫皇后(巻二巻頭歌)や雄略天皇(巻一巻頭歌)などは第一期には含まない。

^{*} 他に、 東歌・防人歌

割 こ ۲ 遷 の二巻セ め 都 た る 後 の で の L١ 歌 ツ あ う が を 3 1 最 で三大 う。 含 も古 ಭ が あ < 部 の る 成 時 立 立 代 が ま し 揃 た、 的 た أ أ な範 部分と考え 本 来 井 は は — 雑 体 平 歌 5 城 の ħ 巻二 遷 も ಠ್ಠ 都 の で ま は こ ある で。 相 の二巻に 聞 の • を、 部、 挽 歌 は 増 分 量 天 の 補 部 皇 の の 立 の 点 を 代 ょ う で 持 毎 _ な つ に 形 巻 歌 で に で を 分 平

巻三・ 巻 兀 ıά 巻 巻二 の 補 遺 لح 追 加

巻 五 が た て 文 は の 序 れ 天 から 大伴旅 は 平 ほぼ 初 取 年 巻五 5 の 六 人 れ た。 年 の Щ 間 み 上 ほ 憶 の 良 特 تع の を 徴。 期 中 元 間 心 号 に ľ の 限 5 大 \neg れる。 令 宰 和 府 を ţ 歌 中 の 心 巻五 前 لح に す 漢 に る 文 九 収 録 の 州 序 さ で を れ ょ 伴 る ま 梅 う れ 花 も た 宴 **ത** 歌 が の を あ る め

巻 六は 巻三の 雑歌 の 補 遺 ۲ 追 加。 こ こ ま で の 諸巻は 基 本 的 に 作 者名を 記 す

巻 七 は 作 者不 明 の 歌 を 集 め た 巻。

巻 八 • 巻 一 〇 は 四季 分 類 の 巻。 巻 八 は 作 者 名 を 記 す 巻 0 は 作 者 不 明 の

巻 九 ば 万 葉 集以前 に 編 さ れ τ い た 歌 集 か 5 歌 を 収 め た

巻 _ た 巻一二は作 考 え れ る 者不 明 の 相 聞 を 集 め た 巻。 歌 に ょ ま れ た 地 名 か 5 近 畿 地 方 の

ー 三 は 長 歌 を 収 め た 巻。 を

۲

5

巻 は 東 歌 を 収 め た 巻。 相 聞 が 圧 倒 的 に 多 い

巻 _ 五 は 二つだ け の 歌 群 か 5 成 る。 前 半 は 遣 新 羅 使 人 の 歌、 後 半 は 狭 野 弟 上 娘 子と 中

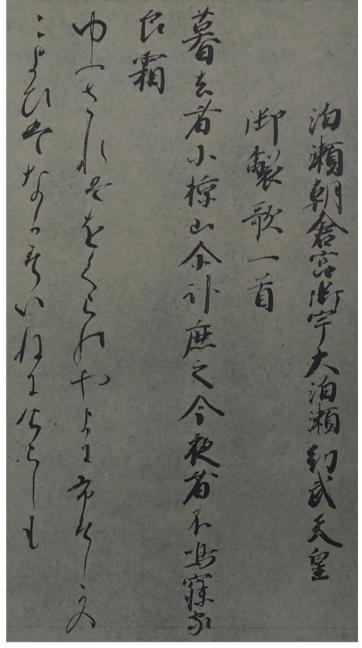
臣 宅 守 ۲ の 答

が の 巻 め ま 歌 _ ۲ の め は 時 < か 5 代 雑 つ ħ は た 天 的 か。 平十 歌 な 巻。 を ま そ 六 لح の 年 物 め 段 以 語 階 τ 前 を こ で 伴 な の は の う 巻 巻 歌 で に _ き 六 収 天 ユ - 1 録 が 平 し 最 + Ŧ た 終巻 六 ラ の 年 ス とな で を な あ あ 歌 3 る ま な う。 の IJ ど で、 降ら が あ そ な ಠ್ಠ れ ŀ١ 時 以 巻 期 前 の に 六 تے 巻 ま + で の 巻 六 の に ま 諸 も で

な て も で 多 うた の が 5 土 わ れ 持 に た 以 な も は 外 の つ 部 の が 立 て 作 が しし 多 者 ι'n る な の ۲ 歌 考え そう ŧ 歌 5 しし 家 が , 年 月 つ 持 ಠ್ಠ たこと と歌 日 を 順 か ゃ に 5 排 IJ 取 列 こ IJ さ れ れ し た 5 て 四 作 しし る。 歌 巻 は ゃ 大 家 持 伴 家 持 家 の 歌 も 持 同 日 の 記 席 歌 が の し ょ た 極 う 宴 め

ま **ത** で で が 3 ま ۲ め 5 ħ た 後に巻一七以 降 が 追 加 さ れ て 現 在 見 る ょ う な 全二十巻に

藍紙本 (巻九・一六六四番歌)



泊瀬朝倉宮御宇大泊瀬幼武天皇

御製歌一首

暮去者小椋山尓臥鹿之今夜者不鳴寐家

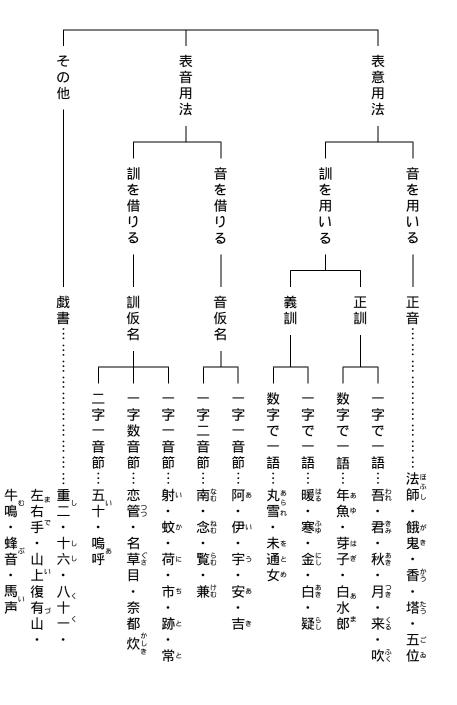
ゆふされはをくらのやまにふすし かの

こよひはなかすいねにけらしも

西本願寺本 (巻一・二八番歌)

看過而夏

春過而夏 来 良之白妙能 衣 乾有天之香来山小パネーテナッキニケラ シシロタベノ コロモサラセラアマノ カ クヤマ天皇御製歌



立。発 所 新 要 見 え が見れる 立 たちてもねても **座** 反見為者 月元 かへりみ すれば つきかた ・ 妹 念 月 西 渡 ぬ 巻十一 **巻** 二四五三) 四八)

名表記の歌》

余能奈可波の (万葉仮名表記 多麻河泊尔 牟奈之伎 左良須弖豆久利 目も 乃^の 等と 志流る 佐良左良尓 等 伎き 子 伊与 奈仁曽許能児乃 余麻 須 万類 計 加。 奈之可利家理 (巻十四・三三七三)に太可奈之伎 巻五・ 七 九三)

訓字表記 + 万葉仮名表記の歌》

夏来良之 霞多奈毗伎 船乗世武登 白がたへかれる 宇良がなり 月?e 待 者 * 許能喜影尔 常 今 第条久母 今者許藝乞菜(巻一米山(巻一・二八) (巻十九 四二九〇)

例》

小竹之葉者 三山毛清尓 乱友 たままり かん 豊旗雲尓 伊理比紗之 競斗海の となばくるに 伊理比紗之読みの決まらない部分を含む歌の記 夜ょ 別^{わかれ} 来礼婆(巻二・清明己曽(巻一 五

百人一首と 万葉 集

秋 の田 の か IJ ほ の庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ(天智天皇)

秋 **ഗ** 田 の か IJ ほ の しし ほのとまをあらみわが衣手は つゆ に ぬ れつつ(後撰 (集302)

作者不明

天智天皇御製

る 仮廬を作り わが居 れば 衣手寒く露そ置きに ける (万葉集一〇 二一七四)

秋

田

灲

春 過ぎて夏来にけらし白妙の 衣干すてふ天の香具山 (持統天皇

春過ぎて夏来たるらし白栲の衣干したり天香具山(万葉集一・二八)持統天皇 はるすぎて夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のか ぐ山 (新古今集175)持統 天 皇 製

春 過而 夏来良之 白妙 能 衣乾有 天之香来山 (同・原文)

あ U び き の Ш 鳥 の 尾 の し だ IJ 尾 の な が な が し 夜 を ひ ۲ IJ かも 寝む (柿本人麻呂)

葦引 の 山鳥 の 尾 の しだりを の ながながし夜をひとりかもねむ (拾遺集778) 人まろ

あ ひ きの Щ 鳥 の尾 の だ IJ 尾の長々 U 夜をひとりかも寝む

(万葉集一一・二八 〇二或本 歌 $\overline{}$ 作者不明

田子 の 浦にうち出でて見 れば 白妙の富士の 高嶺に雪は降り つつ $\overline{}$ 山部赤人)

のうらにうち出でてみれば白妙 の富士の たかねに雪はふりつつ (新古今集675)

山部赤人

子 **ത** 浦 ゆうち出でて見 れ ば 真白に ぞ 富 士 の 高嶺 に雪は 降 IJ け る(万葉集三・三一八)

之 浦 従 打 出 而 見 者 真 白 衣 不 尽 能 高 嶺 尓 雪波 零 家 留 $\overline{}$ 同 原 文

田

児

奥 山に紅葉踏み わけ鳴く鹿 の声きく時ぞ秋 は悲しき (猿丸大夫)

お < Щ に紅 葉ふ み わ け な < 鹿 のこゑきく 時ぞ秋は 悲し き (古今集215) ょ み 人 しらず

か ささぎの 渡せる橋 に お く霜の白きをみれ ば夜ぞふ けにける 中 納言家持)

か ささぎ の わたせる 橋にお < U ものしろきをみれば夜ぞふ けにける (新古今集620

か ささ ぎ の わ た t る は U に お < も の U ろきを み れ ば ょ は ιŠι け に け IJ (家持集268)

納言家持

天 の 原 ふ IJ さけ見 れば春 日なる三笠 の 山に 出 でし月かも (安倍 仲 麻呂

あ ま の 原 ıζı IJ ż け 見 れば か す が なるみ かさ の Щ にに でし月かも $\overline{}$ 古今集406)

安倍仲 麿

	孝徳天皇没						甲 癸 寅 丑	五四		<u>四</u> 二	六六五五四三
第							壬子	Ξ		_	六 五 二
							辛 亥				六 五
							庚 戌	雉元	白		六五
							己酉	五		几	六四·
	天皇と中大兄の対立深まる						戊 申	四		Л	六四
		皇 子					丁 未	Ξ		七	六四·
		中大兄	極	皇	徳	孝	丙 午	=		<u> </u>	六四、
	大化改新						乙巳	化元	大		六四
							甲 辰				六四四
	山背大兄王自殺				桓	与	癸 卯	=		=	六四
					亟	1	壬寅	極元	皇		六四二
							辛 丑	_ =		_	六 四 一
							庚 子	=		0	六四〇
							己亥	_		几	六三九
							戊 戌	<u> </u>		八	六三
							丁 酉	九		七	六三七
							丙 申	八		<u> </u>	六三、
							乙 未	七		力	六三
							甲 午	六		Ӥ	六三四
期							癸 巳	五		=	六三三
							壬辰	四		_	六三二
							辛 卯	Ξ		_	六三
							庚 寅				六三〇
					明	舒	己丑	明 元	舒		六 二 ·
	推古天皇没	蝦 夷		•			戊 子	三六		Л	六 二 ::
		蘇 我					丁 亥	五五		て	六二七
	蘇我馬子没						丙 戌	三四			六二
							乙口酉			力	六 二 二
		<u>;</u>					甲	<u> </u>		四 :	
	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	蘇 馬			古	推	癸 壬 未 午	= =	推	= -	六 <i>六</i> 三 三
	S	表 \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$	***	*	⋾	≜	- *		§	- {	- «
					町	な				半為	五 後 世 半 糸
					各	隹					ī ±
					1	1				# 7	前 1 半 <i>4</i>
	巻二巻頭歌(磐姫皇后)				徳					他	五世紀
期	事項	執 政	皇	先	皇	天	干支	号	年	暦	西
1											

六九七 八八 文	九六	六 九 五 —	六九四	六 九 三	六 九 二	六 九 一	六九〇	六八九	六八八	六八七	八六	六八万五	六 八 四	六八三	六 八 二	六 <i>7</i> 八 <i>7</i>	六 : ハ : こ :	六七九	六七八	六七七	六七六	六七五	六七四	七三	六七二 天	六七一	六 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7	六 : 六 : 九 .	六 <i>7</i> 六 7 八 -	六 ナナ	六六六五五	六六四	六三	六	六 ァ 六 ァ ー (六 <i>ナ</i> 六 <i>王</i> つ <i>ナ</i>	五五九八	六五七	六五三六三元	I
武										統															入武									智						明
二元	_	九	Л	+	<u></u>	Ŧ	Ш	=	_	元		— -	_ <u>=</u>	_ :	_ ;		Ь	Л	+	<u></u>	Ŧ	пП	=			_	+ 1	Λ.	+ -	: 7	. m	=		元十	- -	$\dot{\sim}~$ ${\it \Xi}$	1 匹	Ξ		
戌酉	申	未	午	E	莀	茆	寅	五	子	亥	戊戌	西	†	未 未	Ė	Ė	\(\bar{\cappa}\)	卯	寅	丑	子	亥	戌	西	审	未	午		辰;	卯寅	。 E E	子	亥	戊醛	当	表 申 未	〔 〔	Ę	丙辰	卯
文						持	寺																天	-				天											斉	
武						紛	充																氙	Ò				智											明	
持統																																								
多 治 島 比					皇 子	高市																																	皇之子	‡ 大元
	高市皇子没		藤原宮に遷都					草壁皇子没。草壁皇子挽歌			天武天皇没。大津皇子刑死			大津皇子朝政に参画		草壁皇子立太子	市本人麻呂歌集の七夕歌								壬申の乱。飛鳥浄御原宮に遷都・	天智天皇没	j	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	蒲生野に遊猟	丘工大聿宮こ豊都	間人大后没		白村江の戦い。百済滅亡	1. 文字 客日三〇実日洋〇	新羅に進発。額田王の熟田津の歌		有間皇子刑死			
		第									=									期									第				_				期			_

世	世四三	七四二	七四一	七四〇	七三九	七三八	七三七	七三六	七三五	七三四	七三三	七三二	七三一		七二九	七二七	七二六	七五五		七二三三	七 1 二 - 二 -	= t	· —	_		六	— 五	—	_	— -	ե t - (七〇九		七〇七	七〇六	五	四	七 (0三 三	上 t) (] -	- (
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□															天			1	神						養		霊						和				慶		7	Ε	
要主	_	_	_	_	_	_									平			1	亀						老		亀						銅				雲		Ξ	Ē	
 型 元	五	四	Ξ	=	_	0	九	八	七	六	五	四	Ξ	=	元王	四	Ξ	_ = =	元	七;	六王	三匹] =	=	元	=	元	七	六	五	Ξ [Ξ =	元	四	Ξ	=	元	Ξ:		t [τ
正 正 明 正 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元	癸未	壬午	辛巳	庚 辰	己卯	戊 寅	丁 丑	丙 子	乙 亥	甲 戌	癸 酉	壬申	辛 未	庚 午	己た日辰	表 丁 表 卯	丙 寅	乙 丑 -	甲子	癸 亥 <i>,</i>	壬 章	F 庚 国 申	己未	戊 午	日巳	丙 辰	乙 卯	甲 寅	癸 丑	壬 = 子 :	辛 厚	10 00 00 00 00 00 00 00 00 00 00 00 00 0	戊申	丁 未	丙 午	乙 巳	甲 辰	癸 - 卯 5	壬 宝	子 月	₹ P
元 正 明																		聖								元							元								
正 明																		武								正							明								
横諸兄 を 展																		元								元								•							
一																		正								明															
						橘諸兄							智 麻 돈	水	E STATE OF THE STA				•		- E									不見	泰					麻呂	石 上				_
					この頃、中臣宅守・狭野茅上娘子贈答歌		藤原四兄弟没	遣新羅使人の歌			٦	山上憶良上京か	大伴旅人没	梅花宴。大伴旅人上京	長屋王自殺	大伴旅人大宰帥	山上憶良筑前守			太安麻呂没				養老律令成立					風土記撰進の詔	古事記撰進	平均の方は、日本の一部の一部の一部の一部の一部の一部の一部の一部の一部の一部の一部の一部の一部の	文成 三墨	柿本人麻呂この頃没か					7			一月日昏世之外グ

	大伴家持没。 藤原種継暗殺長岡京着工	藤 是原 公					乙甲系丑子系	四三二	一八八ノ
		魚名			武	桓	炎 壬 章 亥 戌 酉	延 君 原	ヒセイ
							声度		七八〇
							己未	-0	七七九
							戊 午	九	七七八
							丁巳	八	七七七
							丙 辰	七	七七六
							乙卯	六	七七五
		清麻呂					甲寅	五	七七四
		大中臣					癸 <u>=</u> 丑 -	四三	七七三
						:	壬 :	≣ .	七七二
	武蔵国を東山道から東海道に移す一道鏡左遷	永手			仁	光	辛 庚 亥 戌	宝亀二元	tt- 0
							己酉		七六九
							戊申	=	七六八
							丁未	神護景雲元	七六七
							丙午	=	七六六
		道 鏡			徳	称	乙巳	天平神護元	七六五
	恵美押勝の乱						甲辰	八	七六四
							癸 卯	七	七六三
							壬寅	六	七六二
							辛 丑	五	七六一
		押勝					庚子	四	七六〇
	万葉集最終歌	恵美	謙	孝	仁	淳	己亥	Ξ	七五九
	大伴家持因幡守						戊戌	=	七五八
	養老律令施行。橘奈良麻呂の変	仲麻呂					丁酉	天平宝字元	七五七
第	聖武太上天皇没。大伴家持喩族歌	藤原					丙申	八	七五六
Ţ							乙 未	七:	七五五五
	鑑真来朝。大伴家持兵部少輔						甲 午	六	七五四
	大伴家持春愁三首						癸 巳	五	七五三
	東大寺大仏開眼						壬辰	四	七五二
四	大伴家持帰京						辛 卯	Ξ	七五一
			武	聖	謙	孝	庚寅	=	七五〇
	陸奥国黄金献上。東大寺大仏成る	•					己丑	天平勝宝元	七四九
							戊 子	_	七四八
							丁 亥	— 九	七四七
期	大伴家持越中守						丙克	— - 八 -	七四八
	都を平城京に戻す				į	į	乙丁酉		七四日五日
_	一難波宮に遷都		Œ	元	武	聖	甲 申	天平一六	七四四

 巻 十	巻	巻	巻	巻	巻	巻	巻	巻	巻	巻	巻
_	+	九	八	七	六	五	四	Ξ		_	
問寄 证 旋 答 物 心 弱 限 緒	冬冬秋秋夏夏春春相雑相雑相雑間歌聞歌聞歌聞歌聞歌聞歌聞	挽相雑歌聞歌	冬冬秋秋夏夏春春相雑相雑相雑相雑聞歌聞歌聞歌聞歌聞歌聞歌	挽 譬 雑 歌 喩 歌 歌	雏歌	雅 歌	相 聞	挽 譬 雑 歌 喩 歌 歌	挽相歌聞	杂 争 。	部立
	年代不明(二期~四期か)	(一期) ~ 天平一六年頃	一期~天平一五年頃	年代不明(二期~四期か)	養老七年~ 天平一六年頃	神亀五年~ 天平五年	(仁徳) ~ 天平一六年頃	紀皇女・天平期聖徳太子~ 天平一六年持統~ 天平五年頃	斉明~ 元正(仁徳)天智~ 持統	(雄略)舒明~ 元明	時代
	(人麻呂歌集あり)	(人麻呂歌集あり)記名・歌集歌	名名	(人麻呂歌集あり)作者不明	記名	記名	記名	記名	記名	記名	作者名
	正 訓 字 主 体	正訓字主体	正 訓 字 主 体	正訓字主体	正訓字主体	音仮名主体	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体	表記

万

葉

集

各

巻

覧

巻二十 なし	巻十九なし	巻十八なし	† ************************************	巻 ト こ ぶ ン	巻 十六 一 有由	t	巻 十 5 なし	巻 十四 挽譬防相雑 歌喩人聞歌	譬相東 喩聞歌	巻 十 三 挽 譬 問 相 雑 歌 喩 答 聞 歌	巻 十二 問 悲 羇 問 寄 正 寄 正 答 別 旅 答 物 述 物 述 歌 歌 発 歌 陳 心 陳 心	響問寄正
				T	雅 縁 歌		T	歌 歌	歌	歌	歌 歌 発 歌 陳 心 陳 心思思 思緒 思緒	陳心思緒
勝宝五年五月~ 宝字三年正月	勝宝二年三月~ 五年二月	天平二〇年三月~ 勝宝二年二月	天平一八年正月~二〇年春	天平二年~ 一六年四月	二期~ 天平一六年頃	天平一一年頃	天平八年・九年	年代不明(二期・三期か)		年代不明(二期・三期か)	年代不明(二期~四期か)	年代不明(二期~四期か)
名	名	名		3	記名	中臣宅守・弟上娘子	遣新羅使人等	作者不明)	(国名判明)	(人麻呂歌集あり)作者不明	(人麻呂歌集あり)	(人麻呂歌集あり)
音仮名主体	正訓字主体	音仮名主体	音 们 名 三 位	音 反	正訓字主体	音 () 名 日 ()	音 反 名 上 本	音 仮 名 主 体		正 訓 字 主 体	正 訓 字 主 体	正訓字主体